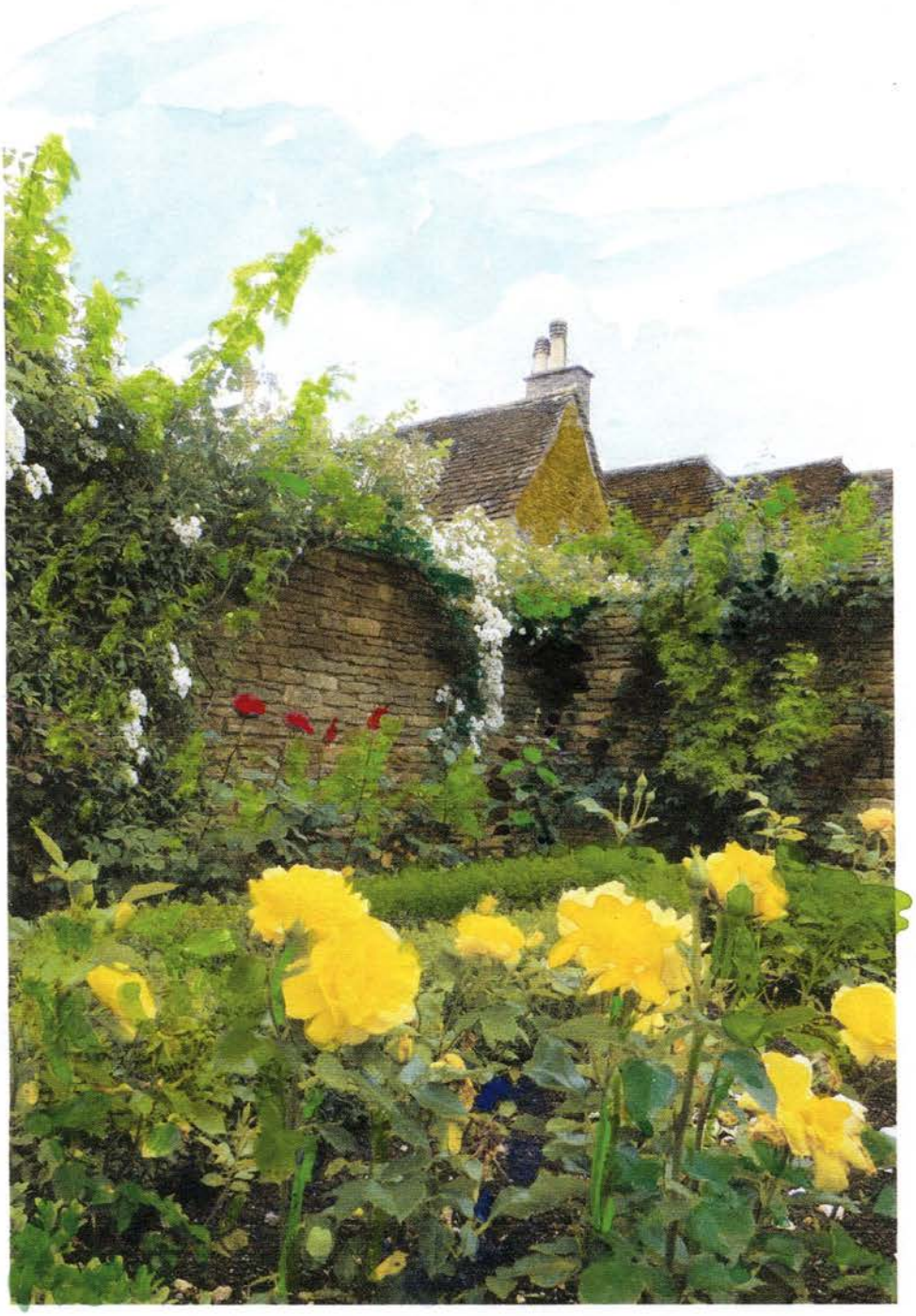
うめがおか

東京都世田谷区歯科医師会会報
http://www.setagaya-da.or.jp/



Ⅳ
2018
No. 175

東南アジア旅行の知的楽しみ方

「インド化」された国々へ　遺跡の旅－ＸＬⅦ

下馬部会　斎　藤　賢　一

今回は沖縄県の世界遺産と石造物についてお話ししたいと思います。沖縄にある多くのグスク（城）及び遺跡の中から、５つのグスク（首里城、中城城跡、座喜味城跡、勝連城跡、今帰仁城跡）と、その関連遺産の４つの遺物（園比屋武御嶽石門、玉陵、識名園、斎場御嶽）が第24回世界遺産委員会会議で2000年（平成12年）に世界遺産登録されました。

今回はこの世界遺産を見に行きます。沖縄の観光にはレンタカーが不可欠です。先ずは空港でレンタカーを借りて首里城を目指します。空港を出て気づくのは、ここは日本ではなく台湾あるいは東南アジアで、風景も空気も臭いも日本ではありません。首里城の駐車場に止めて外に出るとすぐに2000円札に描かれている「守礼門」です（写－１）。中国皇帝の「琉球は礼節を守る国である」という言葉から「守禮之邦」と書かれた扁額が掲げられています。

写－１　「守礼門」

この門をくぐると左手に世界遺産の「園比屋武御嶽石門」（そのひゃんうたきいしもん）がありますが目立たないので多くの人が素通りしてしまいます（写－２）。ここは何かと言いますと園比屋武御嶽の入口の石門です。御嶽とは島の祖神や集落の守り神などを祀った聖地で社殿や像は一切ありません。あるのは自然の木々や岩

写－２　「園比屋武御嶽石門」

だけです。琉球では神は天からこれらの木や岩に降りてくると考えられているからです。ここは国王が城外にでられる際に道中の安泰を祈願した拝所でその他、国家行事の際にも祈願した重要な御嶽です。竹富島の西塘という人物によって築造されました。

さらに進むと首里城に入る最初の門「歓会門」です（写－３）。綺麗にカーブしたアーチ型の石積みの上に木造の櫓をのせています。次の「瑞泉門」は分断された城壁の上に木造の櫓がのる櫓門形式です。ここの

写－３　「歓会門」

写－４　「龍樋」

写－５　「漏刻門」

階段の手前に「龍樋」という湧水があり、素晴らしい石彫りの龍の口から水が出ています（写－４）。次は櫓門形式の「漏刻門」で名前の通りやぐらの内部に水時計があり時刻を測っていたそうです（写－５）。

ここから先は有料で「広福門」でチケットを買い門をくぐると「下之御庭」という広場にでます。広場からは城壁や那覇市内が一望出来ます（写－６）。ここに「首里森御嶽」があります。首里城内で最も格式の高い拝所の１つです（写－７）。石積内の植物はガジュマルやクロツグです。まだ正殿には向かわず、「京の内」へ行きます。首里城内は大きく別けて、政治・行政エリア、王と家族のプライベートゾーン、女性達による祈りの空間の３つからなります。琉球にとって女達の祈りの力はとても大きく国家的な神女組織も作られました。頂点に「聞得大君」その下に上級神女職から地方神女職（ノロ）までピラミッド状に組織しました。「京の内」は神女達の祈りの空間で男子禁制でした。ここはうっそうとした森で御嶽は４カ所あります（写－８）。これらを復元して神秘的な雰囲気が甦りつつあります。何もない森の道ですがとても神聖な雰囲気が漂っています。おそらく神女達は次々に祈りを捧げながら御嶽を移動したとおもわれます。私が訪れた時には誰もいませんでした。「ハブに注意」の看板が目につきます。いよいよ「奉神門」から「御庭」に入ります。「御庭」は赤と白のストライプ模様で正面には「正殿」がそびえます（写－９）。「御庭」のストライプは儀式の際の役人達の立ち位置を示すものです。「正殿」は石積みの基壇の上に建物を建てて、

写－６　「下之御庭」からの遠望

写－７　「首里森御嶽」

写－８　「京の内」

写－10　「書院庭園」

写－９　「正殿」

写－11　「久慶門」

基壇に石高欄を配し、見た目には中国建築ですが正面の唐破風は日本的です。いたるところに龍が、シーサーがいます。向かって右側には書院や番所がある南殿があります。書院の庭園は見物です。琉球式の庭園で琉球石灰岩のごつごつした岩とリュウキュウマツ、ソテツの緑が美しく調和しています（写－10）。奥書院の庭園も面白い作りです。正殿の内部はどこもかしこも漆の赤で埋め尽くされています。２階には朱螺鈿で作られた見事な玉座が置かれています。柱や梁は黄金の龍が描かれ基壇には西域に見られる葡萄とリスの文様が描かれています。「御庭」を出て「淑順門 」をみて「右掖門 」から石造アーチの上に櫓がのる「久慶門 」へ行きます（写－11）。「久慶門 」の左手には「寒水川樋川」と呼ばれる湧き水があります。

ここから「円覚寺跡」へ行きましょう。この寺は1494年に創建された沖縄における臨済宗（りんざいしゅう）の総本山で、第二尚氏王統歴代国王の菩提寺でした。「七堂伽藍」の形式で建造され、境内には多くの建物が配置されていましたが、現在は総門と放生池しか残っていません（写－12）。この放生池にかかる放生橋は当時のもので国の重要文化財です。「円覚寺跡」の前には「円鑑池」と池の中央にある赤瓦の「弁財天堂」があります。堂にわたる小橋は「天女橋」と呼ばれ、中国南部の駝背橋の特徴をもち、石の欄干には蓮の彫刻等が施されています。

ここで首里城見学は終了し、昔からの石畳の道（首里金城町石畳道）を歩きます。1522年頃に築かれた４kmのうち300mが現存します。とても雰囲気のある坂

写－12　「円覚寺跡」

写－13　「首里金城町石畳道」

道です（写－13）。途中に内金城御嶽があります。ここの一角だけ深い森になっていて樹齢200年をこす５本の大アカギが残っています。とても神聖な場所です。王朝時代から残る共同井戸（金城大樋川）もあります。

この道から世界遺産の「玉陵」まで歩きます。玉陵は、1501年、尚真王が父尚円王の遺骨を改葬するために築かれ、その後、第二尚氏王統の陵墓となりました。墓室は三つに分かれ、中室は洗骨前の遺骸を安置する部屋となっています（写－14）。創建当初の東室は洗骨後の王と王妃、西室には、墓前の庭の玉陵碑に記されている限られた家族が葬られました。全体のつくりは、当時の板葺き屋根の宮殿を表した石造建造物になっています。沖縄戦で大きな被害を受けました

写－14　「玉陵」

が、1974年から３年余りの歳月をかけ、修復工事が行われ、往時の姿を取り戻して今日に至っています。外見は木造建築を模し、高欄羽目板には尚家の家紋や牡丹・唐草・宝珠等が彫りこまれ、左右袖塔上には陵墓を守護する石彫りの獅子像が置かれています。高欄の彫刻はとても興味深く蝙蝠の彫刻が中国を感じさせます。左右袖塔上の獅子像は東は雌で子獅子をなめており、西は雄で鞠の紐をくわえています。私が訪れた時には見学者は１人もいませんでした。とても静かで荘厳な雰囲気です。

次に世界遺産の「識名園」へいきます。「識名園」は、琉球王家最大の別邸で、国王一家の保養や外国使臣の接待などに利用されました。1799年につくられ、1800年に尚温王冊封（さっぽう）のため訪れた正使 趙文楷、副使 李鼎元（りていげん）を招いています。「識名園」の造園形式は、池のまわりを歩きながら景色の移り変わりを楽しむことを目的とした「廻遊式庭園」です（写－15）。「廻遊式庭園」は、近世に日本の大名が競ってつくるようになった造園形式ですが、「識名園」では、「心」の字をくずした池の形（心字池）を中心に、池に浮かぶ島には中国風あずまやの六角堂や大小のアーチが配され、池の周囲には琉球石灰岩を積みまわすなど、随所に琉球独特の工夫が見られます。つまり中国、日本、琉球のスタイルを取り入れたチャンプルー（ゴチャマゼ）の庭園です。私が訪れた時は観光客はパラパラで御殿では琉球舞踊の撮影を行っていました。池にかかる石橋が印象的です。

沖縄には復帰後すぐに行きました。友人と二人で神戸から船に乗って那覇港に着くとすぐに税関の人が乗り込んで来て荷物検査をします。本土から植物や害虫を持ち込まないようにするためです。当時のことはあまり覚えてはいません。ドルが使えたことと沖縄そばを毎日食べていたこと、看板のカタカナ表記（バニーガール→バニーギョールなど）がとても面白かった位です。その後30年前にスキューバ・ダイビングを始め、西表や宮古、久米の離島などに行きましたが、沖縄の文化に触れることはありませんでした。今回再訪して琉球文化の素晴らしさを認識しました。次回はグスク（城）巡りをお届けします。

ホームページ　www.ravana.jp → Kyushu → 沖縄
で沖縄の写真が見られます。

写－15　「識名園」